

初期新制中学校教育の状況と戦後の地域文化活動 —秋田県における1事例から—

伊藤日出男*

Reassessment of the new junior high school education in the earliest stage after the second World War, and its sig- nificance today for local cultural activities in Akita.

H. Ito

Summary:

The purpose of this study is to reassess the new junior high school education in the earliest stage of the postwar period and to report on local cultural activities, especially on the drama which was performed by young people in Kameda, a small town in Akita.

Methods:

The methods of study are:

- 1) questionnaires to sixty students who graduated 40 years ago from Kameda junior high school, and interviews with their five teachers.
- 2) questionnaires to twenty people involved in drama activities during 1948-60 in Kameda, and interviews with four of them.

Conclusion:

There are important lessons to be learnt from local cultural activities during the postwar period;

- 1) The vital energies of young people to overcome the conservative mind in the senior generation in a confused society.
- 2) The effective power of the cultural environment and the invisible educational effect on the community when the representation of immoral behavior by young adult is exaggerated by overacting.

(J. Aomori Univ. Health Welf. 1 : 1-16, 1999)

キーワード：新制中学校、青年、地域文化活動

new junior high school, young people, local cultural activities

I 緒 言

1. 研究の動機と目的

本研究は、主として第二次世界大戦後の秋田県において、教育改革によって誕生した新制中学校の教育現場の状況と、戦後の再建に向けて青年達が取り組んだ地域文

化活動について、現在の視点からその意義を明らかにしようとしたものである。

いつの時代であっても、青年は親世代からは不安と期待の入り交じった見方をされるのが常である。戦後初期の混乱した社会にあっても例外ではなく、青年達は敗戦

* 青森県立保健大学理学療法学科 Aomori University of Health and Welfare, Department of Physical Therapy

によって打ちひしがれた親世代から、期待とともに不安をもって注目されていた。しかしながら、いち早く地域の再建に立ち上がったのは青年達であった。その活動形態は戦前から存在した若者組のようなものから、戦後新たに結成された学習を主体とするサークル活動まで様々であった。

例えば、筆者の郷里である秋田県由利郡亀田町（現・岩城町亀田）の場合は、1948年頃から青年達によって盛んに演劇が行われ、町民の大きな支持を得ていた。その演劇運動は1960年頃まで約12年間続いたが、中心的役割を果たしたのは地元の小学校教師達であり、それを継承したのは新制中学校を卒業した教え子達であった。その後、日本の経済復興と高度経済成長に伴って町を離れる青年が多くなり、やがて亀田の演劇運動も自然に終焉した。しかし、亀田の旧城下町としての伝統文化を継承する住民の熱意は、教育の発展を願い、また若い人材の町外流出を食い止めようとする行政側の意向と合致して、様々な活性化事業の中に生かされ現在に至っている。

本研究の目的は、主として秋田県における初期新制中学校の教育現場の状況を、被教育者の視点から明らかにし、また青年達による地域文化活動の実態を明らかにしながら、その今日的意義を考察することである。

2. 研究方法と用語

研究対象と方法：

本稿は、初期新制中学校の教育現場の状況に関する調査と、戦後初期の青年による地域文化活動に関する調査の二つの研究資料から構成されている。資料の収集は次の4つの方法に依拠した。

1) 1986年に実施した筆者の母校である秋田県由利郡亀田中学校の元教師5人に対する面接調査と、1951年卒業の同期生60人に対する郵送アンケート調査の資料。

2) 秋田県内の公的刊行物による初期新制中学校の状況、及び戦後初期の青年による地域文化活動に関する記録。

3) 1945年から1948年までの、秋田県の代表的な地方紙である「秋田魁新報」紙面の青年の動向及び地域文化活動に関する記事及び広告。

4) 由利郡岩城町亀田を代表事例に選定し、1998年1月に実施した戦後初期の地域文化活動—特に演劇運動に従事した人々の中から20人を対象とする郵送法によるアンケート調査。また1997年7月に実施した4人の関係者に対する面接による聞き取り調査。

用語の規定：

本研究におけるキーワードとなる用語の概念を次のように規定した。

1) 「戦後初期」の区分について

戦後の時代区分については多様の立場から諸説あるが、ここでは教育史の立場から文部省の区分¹⁾に準拠し、1945年8月15日の敗戦から、混乱期を乗り切って高度経済成長期に大きく転換する1960年までの15年間を「戦後初期」と称した。

2) 「教育改革」及び「社会教育」について

本研究における「教育改革」は、言うまでもなく第二次世界大戦後の教育改革を対象としている。「社会教育」については、社会教育法の規定²⁾による「組織的」「意図的」な面に捕われないで、一般的に「社会の中で行われる教育」を意味し、地域の教育力や社会的同化、類型的同化といわれる教育も含めて主として文化的な側面から広く捕えることにした。

3) 「青年」と「青年運動」について

一般に青年という場合の年齢的幅は、14～15歳から24～25歳までの男性をいうことが多い。ここでは、主として新制中学校卒業後から25歳頃までの独身男女を対象とした。

「青年運動」については、青年がおかれている社会的状況に対して、その矛盾や葛藤を集団レベルでとらえて青年自身によって起こされた運動³⁾を総称することにした。

4) 「文化」及び「地域文化活動」について

本研究においては、敗戦後の混乱期に国民はどのようなものを“文化”と考えていたか、という視点から稿を進めた。「地域文化活動」については、「地域住民に対してその精神生活を高めるために、主として青年達によって働きかけられた、スポーツを除くすべての活動をいう」と規定した。したがって、学問、芸術、道徳など教養・啓発的な領域だけでなく、大衆的な娯楽・慰安的なものも広く含めた。特に神社の祭典に伴う踊りや郷土芸能、伝統的な民俗文化なども含めて研究の対象とした。

5) 「芝居」、「演劇運動」及び「演芸」について

「芝居」と「演劇」の区別については、ことさら厳密な区分を行わないで一般的な概念から使い分けした。ここでは旅回りの芝居、村芝居、芝居小屋など興行物の総称⁴⁾として用いた。これに対して演劇は、近代の芸術的なニュアンスの濃い新劇を中心として歌舞伎や新派、民話劇なども含めて広く「演劇運動」として捕えた。「演芸」は、劇や踊り、落語、浪曲、曲芸、手品などの公衆の前で大衆的な芸能を演じる芸として（「広辞苑」）演劇とは区別した。

6) “地域おこし”について

一般に“町おこし”“村おこし”などと呼ばれる地域振興事業を総称し、「住民が主体となって地域活性化の効果的なメディアとしてイベントを活用し、新しい

時代にあった魅力的な地域づくりを目指すこと」⁵⁾と規定した。

Ⅱ 初期新制中学校の教育現場

1. 戦後の教育改革

1947年3月31日に制定された教育基本法及び学校教育法によって、国民学校は再び小学校と改称され、高等科は新制中学校の母体として発足した。また1948年4月からは、旧制中学校は新制高等学校として発足した。新制中学校の義務制の適用は1949年度までに完成したが、その間旧制中学校と国民学校高等科及び青年学校在学者も新制中学校に移行したため、校舎や教員の問題など多くの困難があった。

秋田県においても、物資の不足、市町村の財政逼迫、食糧難などのために六三制の実施は困難を極め、その対策として文部省の了解を得て1947年10月から試験的に週五日制授業を実施した程であった(1951年3月まで)⁶⁾。

秋田県内の新制中学校は、1947年の発足時には283校で、1948年には344校と最も多く設立されたが、その後学校の統廃合が行われるにつれて次第に減少した⁷⁾。中学校校舎の建築に関しては各町村とも財源に苦勞し、併せて教員確保や設備充実にも難渋した。さらに当時の食料事情の悪化は深刻で、秋田市内の児童のうち約10%の家庭では欠食したとの報告も見られる⁸⁾。加えて、1947年夏に県下全域を襲った大水害による被害は、市町村財政をさらに圧迫した。そのような社会状況下において、新制中学校の校舎の事情は特に深刻で、1951年に至っても独立校舎を有する学校は、県内で235校中約6割の140校にとどまっていた⁹⁾。

亀田中学校では、1950年11月に町民待望の独立校舎が完成し、木の香の匂う新校舎で授業が行われるようになった。後述の亀田中学校の元教師と卒業生に対するアンケート調査には(N=60、複数回答)¹⁰⁾、新校舎についての生徒の意見として、「校舎が木造なので暖かい感じ」(65%)、「独立校舎ができたので伸び伸びできた」(36%)、「小使室があって便利だった」(18%)、など概ね好評であった。その反面、「理科、図工、家庭科などの設備不足」(47%)、「体育館が狭い」(34%)、「視聴覚教材の不足」(32%)など、時代の厳しさを反映する意見が寄せられていた。

秋田県内の39校の旧制中学校のうち、1948年4月1日をもって大半は新制高等学校として転換設置された。高等学校はそれぞれの学校によって全日制、定時制、通信制の課程がおかれ、また普通科、職業科などの学科が設置された。県内の定時制課程への進学率は、高等学校進学者全体の38%であり、これは当時の全国の定時制生徒の割合が、22.6%であったものと比較するとかなり高い

数字であった¹¹⁾。因みに1950年度における秋田県内の新制中学校238校の高校進学率は35%で、全国の42.5%に比較すると相当に低い¹²⁾。即ち、秋田県の場合は働きながら定時制高校で学ぶ若者達が多かったことを示している。

1955年7月28日、亀田町は隣村の道川村と合併して新たに岩城町が誕生した。それより以前の1949年に、当時の亀田町に本荘高等学校の定時制課程として亀田分校が、1955年には道川村に分室(後に分校昇格)が設置された。亀田分校は発足当時、生徒数70名(男子44、女26)、教員数4名で、普通科と被服科を有していた。生徒数が最も多かったのは1953年の83名で、教員数は8名(本務4、兼務4)であった。初期の亀田分校からは大学に進学し公務員や教師になった人もいたが、1958年頃から次第に生徒数が減少し、1981年には廃校となっている¹³⁾。

前述の亀田中学校卒業生に対する調査の中で、県外に就職しながら定時制高校に通学したある卒業生は次のように述べていた。

「家で農業をやるよりも、都会にでると大きなアンパンを食べられるので嬉しかった。ホームシックにかかっても定時制が救いだった。勉強よりもいろいろな職種の人たちと語り合えるのが何よりの慰めだった。」(自営業男性・横浜市在住)

また、農家を継ぎながら亀田分校に通い、後に北海道に移住したある卒業生の手紙には、「人間は一生勉強であるとの固い信念のもとに、職務の合間に短期大学の通信教育を受けました。スクーリングは土、日、月曜日の3日間でしたが、どうにかやり遂げました(地方公務員・札幌市在住)」と記されていた。

このように、戦後の教育改革によって誕生した高等学校定時制課程は、地方においても中央においても、新制中学校を卒業した働く青少年の教育機関として大きな役割を果たしたことが理解できる。

次に、亀田中学校の教育現場の状況を、卒業後約40年を経過した卒業生たちの目を通して、現在どのように評価されているかについて調査した概要を紹介する。

2. 初期新制中学校の調査研究

この調査研究の動機となったのは、1980年代後半頃から社会的な問題となってきた学校教育荒廃の諸要因の一つとして、敗戦による伝統的な価値規範の否定と、欧米から機械的に移植された新教育にあるとする見方¹⁴⁾があった。また、その頃壮中年男性の自殺の増えてた原因として、戦中戦後の教育による価値観の転換を経験したことが長く影響を及ぼしているとする意見¹⁵⁾もあった。

この二つの問題に対する筆者自身の問題意識が契機となって、「初期新制中学校の研究－秋田県亀田の元教師と卒業生に対するアンケート」という研究論文（明星大学人文学部心理教育学科卒業論文）をまとめた。その論文の中で、第二次世界大戦中の軍国主義教育と戦後の民主主義教育の両極端を体験した、いわば“墨塗り世代”^{16,17)}の視点から、初期新制中学校教育の状況を明らかにする目的で、母校である亀田中学校の元教師と同期の第4期卒業生（昭和26年3月卒業）に対するアンケート調査を実施した。その概要は以下の通りであった。

対象とした元教師は5人、卒業生は全体で120人中半数の60人から回答を得た。調査方法は聞き取り法と郵送法を併用した。結果を要約すると次の通りであった。

- 1) 戦後初期の新制中学校では、終戦後の混乱の中で校舎や設備は不十分であったが、地域社会と学校が一体となって生徒を伸び伸びと育てる教育が行われた。
- 2) 正規の免許をもつ教師は少なかったが、知識偏重に陥らない生活経験を重視するカリキュラムが教師の主体性によって編成された。教師と生徒との人間関係は密接で、生徒の学習意欲は高かった。
- 3) 亀田中学校の第4期卒業生は、当時の教育を高く評価していた。その反面、近年の義務教育の現状に対しては批判的な意見を持つ人が多かった。

この調査結果から、前述の学校教育の荒廃の要因を戦後の新教育に求める意見や、壮中年男性の自殺の原因を戦中戦後の価値観の転換を強いられたことに帰するにはあまりに短絡過ぎるように思われた。むしろ、個人の主体性に関わる問題として捕らえることが妥当であった。すなわち、戦中から戦後の混乱期にかけては個人が主体的に判断する能力を奪われ、右往左往しながら精一杯生きることしかできなかった。同時にそれは意識するしないに関わらず、社会を再構築しようとする共通の目的をもって努力する過程でもあった。

戦後40年を経過し高度経済成長を遂げた1980年代においては、個人がいくらあがいても変わり様がないほど成熟した社会が形成されている。そのような状況の中で、個人が創造性や主体性を発揮する場を奪われ、職場や生活の中で疎外されたまま無力感におそわれているのではないか、というのが結論であった。

その後10年を経過した1997年に、筆者は「戦後初期の青年と地域文化活動の今日的意義」という研究論文（秋田大学大学院教育学研究科修士論文）をまとめた。この研究においては、前述のような戦後教育改革に対する自分自身の問題意識を基盤として、新教育のもとで成長した当時の青年達が、戦後の疲弊した社会の再建のためにどのような文化的役割を果たしたかを明らかにするのが目

的であった。

Ⅲ 戦後初期の地域文化活動

敗戦直後の混乱した社会において、国民はどのようなものを“文化”と考えていたのであろうか。手もとの国語辞典によれば、文化とは「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めていく上の新しい価値を生み出してゆくもの」（「言泉」）と定義されている。

ここでは、便宜上、教養・啓発的な文化と、大衆・娯楽的な文化の二つに分けて、特に後者についてはその代表として映画・演芸及び演劇を取り上げ、主として秋田県内の動向との関連性を考察することにした。

1. 教育的・啓発的な文化

中央と地方という分け方にしたがうと、中央においては敗戦直後の1945年9月頃から46年にかけて、戦時中に逼塞を余儀なくされていた著名な文化人たちの結束の動きが起こり、雑誌の発刊・創刊も相次いだ。一方、地方においても地域の文化人を中心に復員した学生や教員が加わって新しい文化活動が広がっていった。このような国民の戦後の新しい時代に即応する知識・文化への飢渴欲は、活字文化だけでなく演劇、映画、音楽、美術などの視聴覚文化にも向けられていた。

また、物不足や食料事情が背景にあったとはいえ、芸能人・団体の地方公演も積極的に行われ、秋田にも終戦直後から中央の勝れた芸術家や芸能人・団体が訪れ、県民の文化への渴望を癒す役割を果たした。秋田県内各地においても、多様な形の土着の文化運動が起こり、地域新聞の発行、詩人集団による運動、地域の学習・読書サークル、演劇グループ等の活躍が見られた¹⁸⁾。

この頃の音楽活動としては、1945年から小野崎晋三の主導によって全県吹奏楽連盟や秋田管弦楽団が組織され、1946年7月には第1回秋田管弦楽団演奏会が県記念館で開催された。また同年10月には秋田鉱山専門学校で第1回文化祭が開催され、演劇、歌劇、コーラスや軽音楽などの発表がその後の青年達の文化運動の魁となった。1947年9月には秋田師範学校音楽科主催の全県合唱祭が行われ、同年12月には秋田軍政部モロニー教育課長の要請により秋田市内の学生たちによる「クリスマス・キャロルを歌う会」が行われた¹⁹⁾。

農村青年たちにとって祭りや盆踊りは最も身近な娯楽であることには、昔も今も変りはないが、終戦後の農村の状況は純粹に盆踊りを楽しむ環境ではなく、供米と闇行為に揺れていた。また青年学校の廃止によって農村青年達の中心的な教養機関が失われたため、農村文化の建設は掛け声だけでその内容は映画や演劇コンクールにす

ぎず、青年の知性や倫理や感性を育成できないと嘆く声も聞かれた²⁰⁾。

しかし、社会が次第に落ち着きを取り戻すにつれて青年を対象とする学習活動も盛んになっていった。特に、1952年の講和条約発効後は、秋田の文化運動は一層活発になり、生活記録のサークル活動や「うたごえ運動」が県内各地に広まり、演劇も青年会や職場において普及した。その中で、新しい日本の歌舞劇の創造を目指して秋田の農村に本拠をおいて活動を始めた「わらび座」²¹⁾は、学校教育の現場から大きな支持を得て戦後の秋田の文化運動にも大きな影響を与えた。

2. 大衆的・娯楽的な文化

1) 映画と演芸

戦後初期の国民の間で圧倒的な支持を得たのは映画であった。変わり身の早い日本の映画会社は、終戦直後すばやく戦意高揚映画から民主主義啓蒙映画の製作に方針を転換した。秋田魁新報には、敗戦1週間後に早くも「映画、演劇けふ再開」との記事が見える(1945年8月22日付け)。翌年に入ると、秋田においても映画は爆発的な人気で、小正月には超満員の秋田市の映画館で、2階が落下し10人の重軽傷者を出す惨事となった程であった²²⁾。その一方、映画による子供達への悪影響も心配され、新聞紙上には「映画はしきりに接吻する。毒される児童、父兄から遂に悲鳴!」の見出しで、秋田市内の父兄会から出された要望をめぐって賛否両論の意見が地元紙に掲載されている²³⁾。

1946年暮れ頃からは、映画教育の重要性が指摘され、民間情報教育局(CIE)からの映写機や幻灯機による巡回映画が地方にもやってきて、主に小学校の体操場で上映されるようになった。

映画とともに大衆の人気を得たものは地方の演芸会であり、またいわゆる“ドサ回り”のやくざ芝居であった。これらの中には低俗な内容のものも多かったが、農村地域においては根強い人気を得ていた。

秋田県においても、戦前から続いている種苗交換会に付随して行われる演芸大会は終戦後すぐに再開された。演芸大会は、農民だけでなく多くの県民から歓迎され、地元の新聞社主催の全県芸能競演会なども同様に県民からの高い支持を得ていた。

“ドサ回り”のやくざ芝居については、地元紙の読者欄にしばしば投書がみられるように²⁴⁾、読者や教育者の立場からは道義の退廃した低俗文化に溺れるものとして否定される一面を有していた。これらの風潮は、敗戦後の国民一般に漲った解放感と空虚感の入り混じった一断面を示しており、やがて再建に向かって立ち上がってゆく国民大衆のエネルギーを示すものでもあった。

2) 演劇

歌舞伎の腹切りや仇討ちなどは、すべて連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)から封建的忠誠と見做されて敵視され、1945年11月から46年11月の上演許可までは歌舞伎の“冬の時代”であった。秋田県内では、1948年11月になって市村羽左衛門一座が能代と大曲で公演し、前進座は1948年7月にシェークスピア原作「むだ騒ぎ」を、秋田県労働組合協議会と県教員組合の共催、文部省と日教組の後援という形で公演した。さらに9月には、前進座少年劇場「アリババと40人の盗賊」が上演され好評であった²⁵⁾。

占領政策が歌舞伎に対して風当たりが強かったのに対して、新劇に対してはむしろ復興を支援し民主的な国家再建のためにその影響力を利用しようとした。ひと頃はやったやくざ芝居が陰をひそめ、1946年後半頃からは各地で演劇への欲求が芽生えて、菊池寛の「父帰る」や、小山内薫の「息子」などが上演された。特に勤労場面から生まれた優れた作品をもとにした職場の自立演劇や、地域青年団による青年演劇の形で広まったことは終戦直後の大きな特徴であった。1949年頃からは、「ぶどうの会」による「夕鶴」をはじめ民話劇が盛んに上演された²⁶⁾。

劇団「協同座」という新国劇系の専門劇団が秋田市に誕生したのは1945年であった。その第1回旗揚げ公演は、八木隆一郎作「湖の娘」、伊藤永之介作・金子洋文脚色「鶯」、それに行友季風作「国定忠治」であった。1946年には演劇鑑賞団体として秋田演劇文化協会(後の秋田演劇鑑賞協会)が誕生し、中央から新劇を中心に招聘し公演した。文学座の杉村春子主演「女の一生」(1952年)や、俳優座の東野英治郎主演「夜の訪問者」(1955年)などは、特に秋田の新劇ファンを魅了した²⁷⁾。

戦後間もなく秋田でも職場の労働組合で文化部が設立され、音楽や演劇活動が活発に行われた。1947年5月には国鉄土崎工機部、日本鉱業船川工場などの職場演劇を主体に秋田自立劇団協議会が結成された。1948年に開催された主なコンクールは、秋田観桜会主催の演劇コンクール(4月)、アルファ演劇秋季公演(9月)、秋田自立劇団協議会第1回公演(10月)、毎日新聞社主催第2回コンクール(11月)などであった。このような職場や労働組合の演劇運動のあり方をめぐっては、地元の新聞紙上でも活発な議論が闘わされた²⁸⁾。高校演劇では1948(昭和23)年にいち早く演劇部を設けたのは横手工業高校で、秋田南(現・秋田)高校、秋田北高校、秋田市立高校なども盛んに活動した。

一方、金子洋文をはじめ水木京太、八木隆一郎、青江瞬二郎、大江良太郎など中央で活躍する秋田県出身の演劇人も多く、これらの人々と交流のあった新派の花柳章太郎は戦中から、湯沢で公演を行っており、戦後も新生

新派の中堅組が秋田で移動演劇活動を行った。

秋田県内の青年演劇は1956年頃が最盛期で、この年県連合青年会主催による全県青年体育文化祭で演劇コンクールが開催され、11の作品が発表された。1958年のコンクールでは、本荘青年会の「忘れた尺八」が県代表となり、亀田青年会の「結婚申込み」は2位であった。しかし、1967年頃から参加団体が少なくなり、青年会員の離村や出稼ぎ者の激増のあおりを受けて、コンクールは次第に低調になっていった²⁹⁾。

次に、戦後初期の地域文化活動の代表として、青年演劇が盛んに行われた由利郡岩城町亀田の事例を紹介する。

Ⅳ 青年と演劇運動

1. 亀田の歴史と文化的背景

秋田県由利郡岩城町は、日本海沿いに秋田市から南へ約30キロの距離にある(図1)。1953年の町村合併促進法

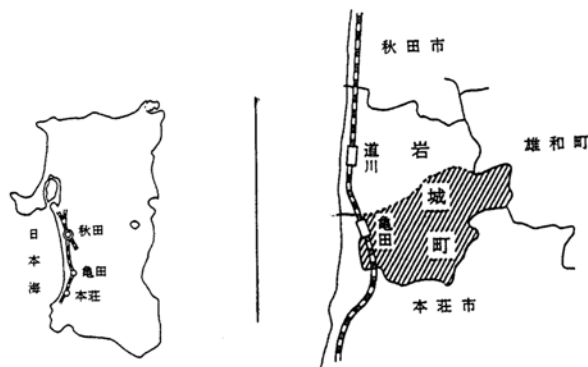


図1 秋田県由利郡岩城町亀田の位置図

の発布により、1955年7月に旧亀田町と道川村が合併して岩城町が誕生した。合併時の人口は8,696人、世帯数は1,482で、職業別では約60%が農業(亀田56%、道川66%)であった³⁰⁾。

明治維新前の亀田は、岩城氏2万石の城下町で戸数も1千数百戸あり、領内の中心地として栄えていた。廃藩に伴って町民の半数を占めていた士族の他への移住と、交通機関の発達による商業圏の変化等によって戸数は次第に減少した。明治以降の町の中心的な勢力は、親方あるいは旦那衆と呼ばれる商人層で、また藩政時代の下級武士層が指導的立場を形成し、剣道、弓道などの武道の興隆とともに、娯楽や芸能も盛んであった。町の中心部には数軒の芸者の置屋と、約300人の収容できる亀田劇場があり、戦前から芝居や映画などが盛んに行われた。終戦直後にも田舎芝居が上演され多くの観客を集めていた。即ち亀田劇場は、町民にとっては唯一の文化娯楽施設の役割を果たしていたのである。

町の中心部を流れる衣川の向う岸の小高い丘の上に、

鎮守の社として熊野神社がある。熊野神社は熊野三山信仰の神社で、現在の社殿は1821年に建立された。熊野神社の夏祭りは例年7月9日で(近年は7月第2日曜日に統一された)、祭典では亀田の町部六町が持ち回りで当番宿を決め、若者たちが中心になって舞う神楽が奉納される。神楽は軽快で節回しのよい囃子と、厳かで威勢の良い舞いが呼び物で、明治期から祇園囃子調の手踊りがこれに加わった。手踊りは戦中・戦後の混乱期には一時中断されたが、1953年に演劇好きの若者達の手によって復活され現在も継承されている。

また、亀田には子供が主役の行事がいくつかあり、その代表的なものが「刻参り(ときまいり)」³¹⁾である。「刻参り」は、旧藩時代から藩校長善館と寺子屋の子供達がそれぞれに分かれて書の上達を競い合い、学問の成就を祈願して7月24日の天神社の祭典に、一刻(2時間)ごとに町はずれの小高い山頂にある神社にお参りしたことに由来している。中学生のリーダーに引率された小中学生達が行列をつくって、将棋の駒の形で提灯を持って「メーリ、メーリ、トキメーリ」と連呼しながら小高い山の上にある白山神社に参拝する。1回終わった後、当番宿で持参の弁当をとり、2回目は年長児だけで明かりの入った提灯をかざして駆け足で参拝する。従前は中学生以下の男子だけで自主的に企画運営されていたが、子供の数が減少したことから、1998年7月の刻参りからは女子も参加し、運営も「岩城町刻参り実行委員会」の手によって実施されている。

2. 戦後初期の演劇運動

戦後初期の亀田青年会は、性別や職業に関係なく20歳以上のだれでも加入でき、会長は戦時中からの継続で小学校教師であった。戦後最初の演劇運動が起こったのは1948年であり、亀田青年会が企画した芸能大会に参加するために、町中心の支部で演劇をやることにしたのが契機であった。当初は男性の参加者がなく女性だけの演劇同好会(会員9人、後に大道具、小道具など裏方として男性5人が参加)を結成し、当時亀田小学校の女性教師達が中心となって、2月11日に亀田劇場において岡本綺堂原作の「修善寺物語」を上演した。

翌1949年10月の第2回公演では、同劇場において「無明と愛染」を上演し、またこの年に亀田小学校において行われた由利郡小学校公開研究会においても、アトラクションとして「無明と愛染」が上演された(図2)。1950年の第3回公演は、菊池寛原作の「恩讐の彼方へ」が上演されている。この頃の演劇指導者は亀田町出身の前進座の関係者や秋田師範学校教員などで、積極的に指導に携わり会員たちも熱心に稽古に励んだ。

この頃、地元の唯一の企業である織物会社に演劇部が



図2 亀田演劇同好会による「無明と愛染」
(1949年10月)

結成され、菊池寛原作の「父帰る」や「屋上の狂人」などが青年会芸能大会に賛助出演した。また、このような青年演劇の影響を受けて、亀田中学校の文化祭でも盛んに演劇が行われるようになり、やがて近隣の中学校にも影響を与えるようになった。しかし、指導的役割を果たした小学校教師の転勤にともなって、1951年頃からは言わば勃興期の演劇運動は休止状態に入った。

戦後亀田の演劇運動の先駆者であり、教員退職後も地域文化運動の指導的役割を担ってきたR. S. 女史(72歳、現・岩城町婦人会長)に、1997年7月26日亀田町の自宅を訪問して戦後初期の演劇運動をめぐる亀田の状況についてインタビューを行った。

「私が演劇を始めた動機は、終戦直後の虚脱状態の中で青年会主催の芸能大会が企画されましたが、町の中心部の私たちの支部では歌も踊りもできなかったのも、演劇をやることになったのがきっかけでした。出し物は『修善寺物語』に決めたけれども、男性の参加者がなくて結局配役は女性だけになったのです。

演劇のメンバーは9人しかいませんでしたが、他に大道具、小道具、衣装などに多くの人たちが協力してくれました。例えば、舞台装置は亀田の祭典のときにお当番宿の玄関に飾る人形の製作者の人が協力してくれたし、演出は前進座と縁のある人で、隣の松ヶ崎村に住んでいたY. S. さんが読み合わせの段階から指導に来てくれました。女の私が主役の夜叉王をやったので、セリフをさんざん直されました。

翌年の第2回公演では『無明と愛染』を取り上げましたが、当時は亀田町民だった秋田師範学校教授のK. M. 先生が学生達に『無明と愛染』を指導したと聞いていたので、私たちもご指導をお願いしたら快く引き受けて下さったのです。M先生は、学生時代に『愛染』を演じた経験がある奥さんと一緒に、読み合わせから立ち稽古まで指導して下さいました。

演劇の経費は殆ど会員の自弁だったように思います。家にあるものを何でも持ち出して利用しました。例えば、『無明』の金襴緞子の袴を作るのに仏壇の打敷を持ってきて、いかにして袂を入れないで縫い合わせるか苦心したものです。

その頃は、中学校の文化祭でも『俊寛』や『父帰る』などの大作をやっており、私も手伝いに行きましたし、本荘中学校で『修善寺物語』をやるといので指導に出向いたこともありました。」

「私が昭和25年4月に本荘市の鶴舞小学校に転勤した後は演劇も一時低調になりましたが、3年後に亀田小学校に戻ってきた時には、若い人たちが盛んに『ガン座』をやっていました。演劇が下火になったのは、昭和24年に亀田にも公民館ができ、制度面ではお膳立てができて選択のメニューが多くなったとしても、自分から苦勞してやる必要がなくなったからではないかと思っています。

演劇は何にもまして人を引きつける魅力を持っています。共通の目標に向かって進むことが関係者の間に強い絆を作るのです。演劇は歌や舞踊よりも子供達を引きつけるので、誰でも懂れるのです。しかし、最近は次第に一部の子供だけの演劇は否定されて、全員が参加するものに変ってしまいました。大勢が参加することで、皆が満足できる良さはもっていますが。」

3. アマチュア劇団「ガン座」

当時、亀田町から羽越本線で本荘市や秋田市に汽車通学する学生達によって、自主的に結成された「学生会」という文芸サークルのような組織があった。「学生会」では「コスモス」という機関誌を発行していた。その「学生会」が初期の演劇運動を引き継ぐ形で、亀田町演劇同好会(会員8人)を結成した。

最初の公演は、1952(昭和27)年4月に亀田町婦人会総会のアトラクションとして行われた小山内薫作の「息子」であった。その後、1954年までの間に、阿木翁助作「二十歳」、伊賀山昌三脚色「結婚申し込み」、木下順二作「夕鶴」などを上演し、素人ながら質的にも高いレベルを目指して会員の努力が続けられた。

1956年7月、亀田演劇同好会では「ガン座」と名称を改めた。会員は18人に増え、教師、大学生、高校生、予備校生、会社員、家事手伝いと職業は様々であった。最初の公演のプログラムには次のような言葉が記されている。

「雁。列を作って飛ぶその秩序と、そして渡り鳥そのものに感ずるロマンチックな味と。雁という鳥は黄泉の国に飛ぶ鳥だそうです。真面目過ぎるほどの鳥なんですね。しゃれこうべにガンとくる!略して「しゃれガン」

な演劇をやりたい。私たちの求めるものは困難です。乗り切ることのできないような大きな波にガンとぶつかって行くことです。漢字で書いて雁。その睦まじさと美しさ。ハイカラな英語で書いてGun。スピードとスリルが生命です。片仮名で書くとガンになります。激しさ、熱っぽさを感じます。こんなものを求めて作ったガン座です。真と善と美を求めて進むのです。それが求められるその日までは一。」

「ガン座」の第1回公演は亀田小学校において行われ、入場者は350人と大盛況であった。出し物は水木洋子作「また逢う日まで」と、木下順二作「彦市ばなし」の2本であった。その年、「彦市ばなし」は隣村の本荘市松ヶ崎の文化祭にも賛助出演した。

1957年の第2回公演からは、30円の入場料を取るようになり、津上忠作「乞食（かんにん）の歌」、チェホフ原作・大山功翻案「三毛」を上演した。この年の公演には本荘高校定時制亀田分校演劇部が賛助出演し、神谷量平作「子をとろ」を上演した。いずれも町民の人気は上々であった。1957年6月のガン座第2回発表会プログラムには、後援団体として婦人会、青年会、愛郷会、公民館の名前があり、また町内の商店や企業など20の広告がガリ版刷りで配布されており、町民からの高い支持を得ていたことを裏付けている（図3）。



図3 「ガン座」の公演プログラム

1958年には田中千禾夫作「おふくろ」、木下順二作「三年寝太郎」を、1958年9月には由利郡代表として秋田県青年演劇コンクールに「結婚申込み」で出演し、惜しくも県代表の座を逸したが特別賞を受賞した。審査委員長の講評では、あまりにも素人離れしていたために、あえて代表にはしなかったとのことであった。

その他、矢代静一作「絵姿女房」、木下順二作「瓜子姫とアマンジャク」、森鷗外作「高瀬舟」などを上演し、由利郡内の各地に賛助出演したり、指導に出向いたりした。

しかし、最盛期には24人まで増えた会員も、就職や結婚などで町を離れる人が多くなり、また指導者の他市への転勤によって中心を失った「ガン座」は次第にその活動が鈍り、1960年以後は公演が途絶えたまま自然解散の形になってしまった。

かつて早稲田大学で演劇部に所属し、卒業後は帰郷して定時制高校教師の傍ら「ガン座」の指導に情熱を傾けたS.S.氏（65歳、現在は郷土史編纂者）は、当時の「ガン座」について次のように語っている（インタビュー：1997年7月15日・S宅にて）。

「新しい演劇同好会は、単に演劇好き、というだけでなく、演劇を通して沈滞気味の亀田の町に新しい息吹を感じさせようというのがスローガンでした。月に30円の会費制とし、会員資格は一切なしで誰でも入会できるようにしました。最初の公演の時には会員が18人に増えましたが、資本金は1ヶ月分の会費540円だけでしたから心細い思いをしました。会員の平均年齢は23歳で、大学生3人、高校生2人の他は皆職業を持っていましたから、練習時間のやりくりも大変でした。若い男女が夜遅くまで出歩くというので、一部の町民からの批判もありました。

公演会場は亀田劇場と亀田小学校体育館で、入場料は30円でしたが、劇場での公演の時はいつも満員で、観衆は平均300人は入っていました。また婦人会、青年会、公民館などから後援して貰いましたので、町民からの信頼は十分あったと思います。

「ガン座」の主なレパートリーは、木下順二の「夕鶴」、「彦市ばなし」、「三年寝太郎」、「瓜子姫とアマンジャク」などで、民話劇が得意でした。他に森鷗外作「高瀬舟」、小山内薫の「息子」、津上忠の「乞食の歌」などの大作もやりました（図4）。公演の要請があればどこへでも出かけ、東由利村、西目町、大内町、本荘市などに出向きま



図4 「ガン座」の青年たち（1957年5月）

した。信じられないかも知れませんが、プロ歌舞団の「わらび座」が亀田小学校で公演した折りに、「わらび座」の座員から共演の誘いを受けたこともありました。

当時の時代背景として、文学座の千田是也を中心とした新劇興隆の時期でもあり、また民話劇は当時の社会に新しさを感じさせたのだと思います。「ガン座」の公演では、いつも重いものと軽いものを合わせて上演しましたが、民話劇は何よりも歓迎されました。

公演の合間には、演技だけでなく、いろいろな面の練習や研究活動もやりました。練習方法は、当時流行したスタニスラフスキー・システム³²⁾をわざとさせて、“読み”半分、“立ち”半分、の方法をとりました。古さを排するために、いわゆる“型”から抜けるように心掛けました。週3回、夜7時から9時半まで正味2時間で、あとは直接劇とは関係ないお喋りをすることによって、なるべく肩の凝らないようにしました。

稽古場として借りていた公民館では、場所だけは自由に使わせてくれました。金は出しませんでした、細かいことには一切口出ししませんでした。いまでは考えられないことですが。

研究テキストに反戦思想の濃い戯曲のマックス・フリッシュ作（加藤衛訳）の「そら、また歌ってる」³³⁾を取り上げたこともあり、いま振り返るとかなりレベルの高いことをやっていたように思います。「ガン座」の運営には民主的を第一に心掛け、野外レクリエーションやゲームなどもやって健全なサークル活動にしました。

私が亀田分校から本荘高校へ転勤が決って、“その内に又やるべし”ということにしておいたのですが、戻ってみたら公民館の倉庫に保管しておいた道具類は皆なくなっていました。多分公民館の人達に捨てられたのでしょう。」

「ガン座」の解散の背景には、脚本の選択をめぐる会員の間に意見の対立があった。それは、いわば新しい演劇理論（スタニスラフスキーによる）を主張し、創造性を求める後から加入した会員達と、会員の融和と町民の支持をもとに地道にレベルアップを図って行こうとする以前からの会員達の相克でもあったと、S氏は淡々と語ってくれた。

4. 青年演劇に対する住民の評価

—もと「ガン座」会員へのアンケートから—

以上の亀田の演劇運動を、初期、中期、後期の3期に分類することができる。

初期（1948—1950年頃）：いわば青年演劇の勃興期で、小学校女性教員を中心に演劇同好会が結成された時期である。年1回の公演は前進座様式のものが多く、プロの演劇関係者から直接指導を受けた。亀田町だけでなく近隣の学校演劇や職場演劇に影響を与えた。

中期（1952—1955年頃）：勃興期の後、一時中断してい

た後のいわば再生期で、学生中心の自主的なサークル活動であった。演劇の再興を町民は期待をもって見守っていた。これが「ガン座」の創設につながった。

後期（1956—1960年頃）：いわば「ガン座」全盛期で、町民の文化的欲求に応えることを目的とし、アマチュア演劇の質的向上を目指した。年2回の自主的公演活動を続け、町民から高い支持を得た。近隣の町村にも演劇の普及に大きな影響を与えた。

青年演劇衰退の理由をみると、中期は発展的解消と言えるものであったが、初期と後期の共通点としては会員の転勤や就職、結婚などによる町外への転出によって次第に会員不足に落ち込んだことであった。

次に、「ガン座」のもと会員達に対するアンケートから、「ガン座」に入会した動機や、練習や公演の印象、当時の町民の反応などについて代表的な意見を集約した。回答者は17人（男性9人、女性8人）で、回答時の平均年齢は61歳、調査は1998年1月15日から2月28日であった。ガン座に参加したときの年齢は平均19歳であった。回答者の中には前記の亀田中学校第4期生が3人含まれていた。

1) 「ガン座」に参加した動機について

「ガン座」に参加した動機については、既に「ガン座」で活躍している友人や先輩に誘われたという人が多いが、大多数は新鮮な文化的雰囲気を持つ集まりに何よりも魅力を感じて参加していた。殆どが中学校演劇の経験者で、中には予備校生や大学生で帰省中に一時的に参加した人もいた。そのいくつかを紹介する。

「亀田中学校で『修善寺物語』を経験した後に、秋田北高校に入った同級生3、4人と一緒に何の動機もなくガン座に入った。」

「高卒後、職もなく毎日ぶらぶらしていた時に、ガン座に入っていた同級生に誘われて入会した。中学校時代に演劇部に入っていたので、発足当初からガン座には入りたいと思っていた。」

「ガン座になる前の演劇同好会だった昭和29年頃に（中学3年生）、ガン座の代表だったY.K.さん宅にレコードを聴きに行ったのがきっかけで演劇に興味を持つようになった。」

「東京の予備校在学中の夏休み帰省中に『夕鶴』の演出をやっていたHさんに誘われて参加した。その後断続的に『彦市ばなし』、『結婚の申し込み』、『乞食の歌』などに参加した。」

「大学で演劇サークルに所属していたので、帰省中にガン座の活動に参加したが、正式な会員になっていたか定かでない。」

「戦後、巷には文芸至上主義的な風潮が広がり、それに乗せられたのかも知れない。亀田には他の町村とは異なる歴史的な風土があり、その影響も受けていたのかも知れない。小生の場合はSさんから誘われて動いた記憶があり、例えば『わらび座』のような使命感に満ちた燃ゆる思いの参加とは言い難かった。」

2) 稽古や公演で一番印象に残っていること

セリフの稽古のことや先輩の演技に対する賞賛など、あるいは裏方としての感動や失敗談、また多くの回答者が、地の町村への賛助出演（“ドサ回り”と称していた）についての強烈な印象を述べていた。

「先輩の人たちとの会話や、前向きな姿勢に感銘を覚えた。演劇そのものよりも座の雰囲気楽しかった。」

「公民館で夜遅くまで練習したこと。公演が終わった後の充実感と一体感が印象的。」

「議論するときは侃々諤々やっていますが、いざ実行になると皆黙々と熱心に動いていた。本当に素晴らしい集団だった。」

「S.S.先生の手順には感心していた。俳優になるべきだと思っていた。」

「私が2、3カ所セリフをとばしても、Sさんはちゃんと合わせて劇を終えてくれた。」

「入会した頃は一番年下だったが、多くの出し物に出演した。道川の祭典で、『乞食の歌』の主役がいないので、岩城町連合青年会から顧まれて賛助出演したこともあった。」

「舞台装置を作る人たちはすごいと思った。いま秋田大学教授のR.S.氏は、松ヶ崎から出かけてきて夜遅くまで取り組んで、素晴らしい舞台を作ってくれたのがとても印象的だ。」

「『また逢う日まで』のヒロイン蛭子が爆撃を受けて死ぬ場面があり、いざ本番のとき爆撃音がスピーカーから流れなかった。音響を担当したのは私だった。後で器具を点検したらボリュームのつまみが最低になっていた。ちなみに“煙”担当者は青い杉の葉をいぶして団扇で扇いで効果をあげていた。」

「公演後の観客の拍手で手応えを感じ、裏方だったが感動した。」

「“ドサ回り”と称して他の町村で公演したこと。トラックに大道具、小道具と一緒に全員すし詰めで乗っていった。地元の人々との交流も懐かしく思い出される。」

「西目町や東由利町に公演に行き、幕間に一人で踊ったこと。」

「全県青年演劇コンクールで演技を貰ったこと。」

3) 「ガン座」に対する家族や町民の反応について

「ガン座」に入会したことに対しては、各会員それぞれの家庭の状況に応じ家族の協力があったり、或いは反対されたり様々であった。町民の一部には白眼視する向きもあったが、「ガン座」の活動は概ね好意的に見られており、公演は毎回歓迎された。また会員自身にとっては、文化的には貧困だった当時の地域社会に大きな貢献をしたとの自負を持っていることが伺われた。

「家族はいろいろな面で協力してくれた。私は家事手伝いなので、自由に公演にも行くことができた。」

「家族の会話の中で、いつも練習風景などが話題になり、家族の理解と応援によって練習にも参加しやすかった。」

「兄も『無明と愛染』や『恩讐の彼方』などに出演していたので、家族がどうということではなかった。強いて言えば理解があったと言うことになろうか。」

「私が参加した頃、家族はほとんど我関せずという感じだった。どちらかといえば少し協力的というところか。私の後に参加した弟の方が、もっともっと夢中になってしまっただけ。」

「家族は賛成してくれたし、後で姉も入会した。友人们も青年会を通して後援してくれたし、隣り近所の人たちもよく入場券を買ってくれたと思う。」

「母親が劇場の前の席で見つめていたのが今でも目に浮かぶ。普段の生活からは考えられない我が子の演技に拍手を送っていたのかも知れない。」

「ほとんど夜に出るので、家族にはあまり良くは見られていなかった。特に私は女なので。周りには不良とされている人もいた。演劇ばかりでなく、クリスマス楽しみ会、豆名月、なべっこ遠足など、とっても楽しかったのに周囲の人には不真面目に見えたのではないかな。」

「我が家では兄たちは協力的だったが、両親は少々心配していたようだ。勉強もしないで遊んでいると……。勉強よりも素晴らしいことを体験したのに。」

「家族の反応は、中高生のことであり夜外出することには反対で、よく口論したのを覚えている。練習に熱が入ると門限（8時）に遅れることが多く、戸口の鍵を掛けられることも何度もあった。」

「亀田の町はもともと演劇を含め大衆娯楽に寛容な土地柄だったと思う。町民はガン座の公演に好意的であり、衣装や小道具なども協力してくれた。次はいつ、何を公演するのかよく聞かれたし、町の人たちのガン座への評価は全般に良かったと思う。」

「『また逢う日まで』と『彦市ばなし』の制作担当だったので、婦人会などとの渉外的な仕事が多かったが、どの団体も好意的だったという印象が残っている。亀田と

いう土地の文化的な基盤の広さというか、藩校時代からの蓄積みたいなものがあつたのかと思ったりしている。それに、社会的にも文化への飢餓的状况にあり、これが受け入れられる要素だったと思う（映画、芝居はいつも満員だった。）

「町民に楽しみをあげたことは間違いないと思う。」

前述のように、戦後初期の演劇や音楽などの文化活動は、労音、労演、民音など労働組合運動と深く結びついて発展した。そのため、一般的には演劇運動に携わる青年は左翼思想の持ち主として（多くは“アカ”呼ばわりされて）、地域の人々から敬遠される一面も持っていた。その点では、亀田の場合学生会や婦人会が後援団体となりスポンサーでもあったために、「ガン座」の演劇運動は町民から素直に受け入れられたと見ることができる。

V 戦後地域文化活動の今日的意義

戦後初期の青年たちが集まったり何か活動をしやすかったのは、地域社会に娯楽的なものが少なかったという終戦直後の時代背景があつた。それから約半世紀を経て、現在のように多様な娯楽や文化的な情報が溢れている環境の中では、自らの方向性を失っているかのように見える青年層に対して、目的志向的な行動を要求するのは難しいかも知れない。しかしながら、現在の青年達やその親世代にとって、戦後初期の青年運動から学ぶものがあるとしたら、それは青年達の“生きる力”即ちエネルギーと、地域共同体の目には見えない教育的・文化的機能ではないだろうか。

ここでは、その戦後初期の地域文化を生み出した青年達のエネルギーを、現在各地で行われている俗に言う“地域おこし”⁵⁾ 事業とを比較してみたい。また、ともすれば無軌道な方向に走り易かった当時の青年達の行動に歯止めをかけ、軌道修正を促すことができた演劇や芸能の人間形成面での影響力について考察する。

1. 青年と“地域おこし”

言うまでもなく、青年について語る場合、他の年齢層と切り離して論ずることはできない。“生きる力”即ち、エネルギーについても、青年期だけの特有のものではなく、幼少時期からの家庭の躾けや地域共同体の教育力によって徐々に育まれたものであろう。この“生きる力”の根元を探るために、再びもと「ガン座」会員アンケートから、地域社会に対する青年達の意識に関する回答を取り上げてみたい。

1) もと「ガン座」会員の“青年意識”

「その頃の人たちは皆一人ひとり自分の意見を持って

いたが、私などは隅っこで聞いているだけでも文化人になったような気がしていた。私はいま『昔しこ』の語り部をしているが、もしかしてガン座の影響が少しはあるのかも知れない。」

「昔と今の亀田とは隔世の感がある。私も40年振りで亀田に帰ってきて、文化運動にも参加していないから大きいことは言えないが、当時のような若者が町で見かけない。城とか何とかの箱ものは沢山できているが、空疎な存在に見えて仕方がない。人材不足なのか、亀田独特の？よく言えばプライドの高さ、反面“井の中の蛙的”保守性で凝り固まった年代の集団のようにも思える。」

「私たち昭和16年生まれは、お茶、お花、習字、絵（デッサン）など、ほとんど夜は習い事をしていた。お茶とお花以外は月謝を払った記憶もなく、今思うと当時の先生たち（小中学校教師）はボランティアで教えてくれた。親たちも当然のように月謝がなかった（出さなくてもよかった？）ためか、どこへでも行かせてくれた。私たちは先輩たちが道をつくってくれた中で、ぬくぬくと文化にくるまれたように思う。現在、娘（昭和43年生れ）がそのような文化に触れることもなく、主人（亀田出身・昭和14年生れ）とお茶でもお花でもと提案すると、「バーカ言わないと」と、一ゲキされてしまう。秋田生れの娘には、何もない！」

「今も青年たちの文化的な活動はあるにはあるが、大部分は上部からの肝いりの的なものが多いような気がする。パチンコ、ゴルフ、競馬など個人的に楽しさを追っている若者が多く目に付く。私のいる町では青年会という活動母体さえないのではないかとと思っている。受験など小さいときから競争の場を通り抜けて個人主義が（全く否定はしないが）徹底して身に付いたのかなと思ったりもしている。“町おこし”などと行政では言っているが、こうした文化的活動に青年のエネルギーが燃えることがあったらと思う。」

このように、亀田のもと「ガン座」会員の意見は、彼らの青春時代の懐古とも絡んで、現在の青年たちに対しては概ね否定的な見方をしている。しかしながら、回答者の大半は既に第一線から引退する年齢に達しており、また約半数は郷土を離れて他に居住している人達でもある。そのため、実際には郷土の後輩でもある青年達と直接接していない人が多いので、必ずしも青年に対する見方が適切とはいえないかも知れない。

そこで、現在岩城町において行われている“地域おこし”に関連する情報を集約し、岩城町の社会教育に従事している関係者の意見を聞いてみた。

2) 岩城町の“地域おこし”

岩城町の“地域おこし”は、1986年に旧武家屋敷、肝入り農家、鍛冶屋、等の建物を一郭に集めた史跡伝承の地「天鷲村」を開設し、同地域内に天守閣や史料館、美術館などを付設したことに始まる³⁴⁾。史料館には旧藩主岩城氏ゆかりの品々を展示し、美術館には主として岩城町関係者の作品を中心に展示し、また旧藩校を復興した図書館や伝統の織物である「ぜんまい織り」の実演コーナーなども設置されている。

これより先、1979年には、旧亀田藩に関係する2市4町を巻き込んだ「旧藩祭り」が行われ、各地の様々な民俗芸能の交流や、岩城氏の前任地福島県いわき市と提携した文化交流などが現在も継続されている。また1990年からは、岩城町教育文化に特に貢献した知識人の文集をほぼ年1回のペースで発行し、「ふるさと創生事業」として位置付けている³⁵⁾。

もと「ガン座」会員で、現在は岩城町史料館の館長として社会教育の第一線で活躍しているM. S. 女史(57歳)は、彼女の子どもの時代と現在の亀田を比較して次のように述べている(1997年7月20日・史料館にてインタビュー)。

「もともと、亀田町内には芝居好きの風潮がありました。戦時中の5、6歳頃から祖母に連れられて町の劇場に“ヤクザ芝居”を見に行きましたが、子ども心に新鮮な刺激があったように思います。町内では“ゆうわ講”や念仏講など女性たちの集まる機会が多く、“ヤクザ踊り”が披露されたりして賑やかでした。祖母たちの“ゆうわ講”では、必ず太鼓に合わせて歌や踊りが行われ、見惚れたものでした。」

『ガン座』では中学3年のときに『おふくろ』で主役の娘役に抜擢されてから、4、5本に出演しました。しかし、昭和35年頃から地元を離れる人が多くなり、『ガン座』は自然消滅してしまいました。

私は1972年から岩城町教育委員会に所属し、後に社会教育の分野で主に公民館のお手伝いをしました。その中で特に農業近代化ゼミナールでの若い人達との出会いが印象に残っています。その前年に町の第1回文化祭が行われましたが、そのテーマが『若さと伝統の調和』でした。第2回目からは青年会の演劇指導にあちこち出向きました。演技指導だけでなく、ポスター描きもやりました。

その頃の青年会は、町と公民館主催の青年研修会がきっかけになって、その後青年学級も開設され、青年達の熱意が実って亀田地区、道川地区に演劇が復活しました。演劇は年1回文化祭の前夜祭として行われ、4、5年続きましたが、青年会員の交代などで後継者が育たず自

然に消滅してしまいました。

その頃は、各集落の子ども会や老人会などから要請があれば、事業の一環として重いエルモの16ミリ映写機をもって教育映画の巡回映写会を行いました。導入としていつもマンガを利用しましたが、子どもだけでなく大人も大勢集まっていました。まさに視聴覚教育の始まりでした。」

「現在、青少年を対象とした事業としては、青少年健全育成事業や高校生のつどい、各種のゼミナールなど、町の行政主導で助成金を出し、講師を招聘し、研修会を開催し、青少年の指導や組織化に地域ぐるみ町ぐるみで運動を盛り上げています。しかし、運動実施母体(父兄)と青少年の意識のずれは大きく、実が上がっているとは言えない現状です。

ガン座の後を受け継いだ1972年頃の演劇青年達は、現在職場で中間管理職として活躍しています。役場に入った人も何人かいますが、実質的にはこの人達が町の推進役となって“地域おこし”をやっているのです。非常に残念なことに、その後を引き継ぐ青年達がいらないことです。スポーツや趣味的なものには参加するのですが、町のために何かやらなければ、といった義務的なものになると、途端に拒否反応を示すのです。

『ガン座』当時の青年たちの場合を考えると、部落の若衆や学生会を中心に活動の場を自ら求め、自分の可能性を自分自身で開拓し、自分たちで地域に新しい息吹を興すのだという自負と情熱があったように思います。その基盤となったものは、幼少期からの年代を越えた遊び集団ではなかったかと思います。遊び集団は、兄弟・姉妹のように自然に親密さと秩序ができ、組織(グループ)として醸成されやすい要因ではなかったでしょうか。この異年齢の遊び集団が、町の伝統行事の刻参りやナマハゲなどの継承を可能にしているとも言えるのです。」

S館長が縷々述べていたように、現在の青少年には地域共同体の活動に主体的に参加し、その一員として役割を与えられる機会が少ないように見られる。以前はごく一般的に行われていた地域に伝わる民俗行事(例えば、小正月や盆行事など)に、子供も小さいうちから大人と一緒に参加し、家庭や地域社会の中で子供の役割が慣習として決められていた。これらの地域の伝統行事や民俗芸能は、現在各地で見直され継承することで地域の活性化につなげようとする傾向が見られる。しかし、そのような事業を単に地域の活性化の道具として使用するのではなく、あくまで教育的な面から子供が参加する意義を再評価することが必要なのではないだろうか。

現在の青少年達が、伝統文化から何を学ぶのか、それには彼らが学びたいと魅力を感じるような芸能や行事な

のかが問われる。そこに学校教育を含む社会教育行政の視点がおかれる必要があるだろう。S館長は、そのキーワードとして幼少時期からの祖父母と孫との関係をあげていたのは印象的であった。

2. 地域文化の教育的機能

1) 演劇と教育

手許の国語辞典によると、演劇とは、「作者の仕組んだ筋書き（脚本、台本）にもとづき、俳優（演者）が舞台の上で言葉（台詞）・動作によって物語・人物また思想・感情などを表現して観客に見せる総合芸術で、多くは演出者が一定の劇作術のもとに指導し、舞台装置・照明・音楽などにより効果をあげる」ものと定義されている（『広辞苑』）。

演劇は本来祭りと一体になって発展してきた芸能であり、日常の社会生活の秩序から逸脱して、抑圧されていた生のエネルギーを奔放に溢れ出させる場を作り出す³⁶⁾ことができることに基本的な特質がある。そのため、一面では秩序ある社会規範の伝達とは必ずしも相容れない方向性を持ち、戦前は時に権力側からは反社会的、反教育的なものとして見られる性質を有していた³⁷⁾。

終戦後は一転して全国各地で演劇や演芸が氾濫し、特に1945年から1947年頃にかけて、文部省が新しい学習指導要領の中で劇的活動を奨励したと結びついて、一時学校劇の復興が見られ、各種のコンクールなども盛んとなった。

最近では、演劇と教育の接点は単に児童演劇などの鑑賞の場や、学校劇などの演劇活動の場としてだけでなく、授業の中での課題の劇化（ロール・プレーイング）なども行われている。すなわち、戦前の学校劇が子どもに芸術を教えるという立場だったのに対して、戦後の試みは教育方法としての演劇的活動を重視するようになっている。

もと「ガン座」の会員たちは、演劇の魅力について次のように述べている。

「当時、娯楽も少なく町全体に活気もなかった時代で、学生会が中心となり演劇、レコード鑑賞、コーラス、雪の芸術など文化的な活動を通して地域に刺激を与えたと思う。その活動の中でも、演劇はキャストだけでなく、衣装、小道具、舞台装置などスタッフがいてはじめて機能する総合芸術であり、社会人、大学生、高校生と年代を共通の目標に向かい、各々の能力の範囲で自己実現できる場が演劇であり、魅力を感じた要素だった。」

「未知の何かを創造したいという若き日の欲望を充足させる場であったと思う。絵を描いてみたいとか、歌を歌ってみたいとかと同質の、もっぱら個人的な趣味嗜好

に基づいて行動していた。」

「当初スタッフとして参加したが、役が付き、大学生の演劇経験者の演技指導で、基礎的な練習も加わり、質的な向上も喜びであったが、特に公演のさい、自分の演ずる演技に観客が熱っぽく反応してくれる息使いに、えもいわれぬ快感を覚えたのを記憶している（役者は三日やったら止められないということか）。」

言うまでもなく、思春期から青年期は心身の激動期であり、社会生活における個人の役割を模索する時期でもある。昔からこの時期には「若者宿」³⁸⁾などにおいて演劇的、儀式的な通過儀礼が設定されていた。現代ではそれに代わるものとして、非日常的な化粧をしたり異なる衣装や仮面を身につけ、踊りなどの様々な演劇的行為（パフォーマンス）を行うことを通して、彼らのエネルギーを解散し、物事に集中させ、仲間との協力と競争によって危機を乗り越え、それによって自己認識を高めて行くという機能を演劇は持っている。

また、観客は俳優、戯曲（作者）とともに演劇の3つの要素（あるいは演劇を加えて4大要素）の一つであり、演劇の興隆を左右する存在でもある。「ガン座」会員たちの述懐にあったように、戦後初期の10年間に亀田の青年演劇が発展した要因として、地元町民の観客としての参加があったことを見逃すことはできない。

総合芸術としての演劇は、いつの時代においても時空を超えて人の心を魅了する性質を持っている。しかしながら、テレビをはじめとする多様な刺激的な情報が氾濫する現在においては、子供達が劇場に足を運んで演劇鑑賞をする機会は少ないだろう。それだけに、小中学校の頃から演劇の魅力について親や教師側が意図的に教えることが必要である。

戦後初期の亀田の演劇をリードしたR.S.女史が嘆いていたように、学校の文化祭などで単に役に選ばれないというだけで、生徒に不公平感を与えることを懸念するような狭小な考え方ではなく、役者も裏方も観客も一体となって演劇が構成されることを生徒に教え、演劇鑑賞の魅力を実感させることが、はるかに教育的意義があると思うのである。

テレビのような一方的で受け身のメディアに飽き足らない子供達が、自分の身体を使用して表現する地元の伝統的芸能に魅力を感じている。秋田県においても、各地の番楽や農民歌舞伎が、地元の中学生や高校生の参加によって継承され、住民の熱心な支持を得ている現状はこのことを裏付けている³⁹⁾。

2) 「文化」と人間形成

地域社会において、「文化」というものが青少年の人間

形成にとってどのような影響力を有するものなのか。
「ガン座」の例に見たように、異なる年齢集団による相互教育や人間形成の面での意義は、全国の農村各地で昔から行われていた「若者宿」や、一面ではドイツに発祥したワンダーフォーゲル運動⁴⁰⁾とも共通するものであった。再び、もと「ガン座」会員のアンケートから、彼らの青年に対する意識について注目する。

「向学心が旺盛だったから、少しでも教養の向上を願っていた。また社会人や大学生の方々から、新しい感性を吸収しようと思っていた。」

「入会した当時は漠然とした思いだったが、当時の燃える心を持った会員に触発されて、自分の心も次第に高揚していったような気がする。」

「年代を越えてといっても、グループ全体は若く、男女の別なく自由に活動でき、演劇だけでなくいろいろ啓発された事柄も多く、多感な学生の一時期貴重な体験だったと思う。」

「とにかく見るもの聞くものみな珍しく夢中だった。難しいことは分からなかったが、皆さんから良く教えて貰ったことに感謝している。」

「学生演劇の生かじりの演劇論などを引っぱり出して皆さんと議論したり、芝居作りのお手伝いをしたりして、亀田の諸先輩や同世代の人たちとの繋がりを持たせ小生にとって唯一の“場”だった。それ以降、教職についてからも演劇部を作ったり指導したり、退職までずっと高校演劇に関わってきたし、アマチュア演劇にも10数年関係している。」

次に、もと「ガン座」会員で学生時代からプロの演劇家を志し、現在は教育紙芝居の普及をライフワークとしているT.K.氏は、郷土の文芸誌に「ガン座とかみしばい」⁴¹⁾と題する一文を寄せているので抜粋して紹介する。

「私の学生時代は、亀田の演劇好きな青年達の集まりである『ガン座』と、秋田大学の演劇部である『北の会』との掛け持ちでやっていました。『ガン座』の公演が近付くと殆ど毎晩公民館で稽古でした。舞台装置や小道具、照明などみんな公民館で作りました。(中略)」

「大学を卒業して演劇で食べて行こうとして上京し、大学の教授の推薦状と酒一升をもって文学座を訪ねたら、1年間は研究生だから勉強して貰います、アルバイトも出来ないスケジュールだと言われて……。演劇でお金を稼ぐつもりが、授業料を出せでは、天と地の違いでした。結局食べていくのに仕事を探していたところ、この紙芝居の世界から救いの手を差し伸べられました。演劇青年が日本独自の文化と言われる教育紙芝居の魅力に取

りつかれて20数年経ってしまいました。(中略)」

「亀田の人たちを感動させた数々のレパトリー、またドサ回りなどを思い出しています。思えば数多くのすばらしい先輩と一緒に夜遅くまで練習した仲間たち、今でも夢に見ます。そして、やっぱり紙芝居も演劇なのだと、自分に言い聞かせております。日本の文化財である紙芝居を愛している一人が、『ガン座』の出身であることに誇りを持っています。」

このように、青年演劇「ガン座」は戦後世代の若者らしい新鮮な感覚に満ちていた。しかも、20歳代を中心に異なる年齢のメンバーから構成されていたため、「ガン座」に所属したことは単に演劇に親しんだだけでなく、彼らのその後の人生の方向を決定する程の大きな影響力を有していた。

地域文化活動を、人間形成という側面から見ると、人間形成は必ずしも既存の文化の中に新しい世代を編み込むことでも、個人を一方向的に社会化することでもなく、既存の文化の変革や更新の可能性をその文化の中に育てる役割を有している⁴²⁾。このことが、亀田の事例を通して実感として理解できる。

戦後の教育改革によって、民主的な新しい文化を享受している若者達にとっては、戦前からの古い行動様式から抜け出すことのできない大人世代は許し難い存在であつたろう。彼らは古い文化を批判し、それを変えて行こうとして全身のエネルギーを傾注した。戦後初期の青年達は、既存の古い文化に対立する新しい文化を創造しようとする意欲に満ち溢れており、そのことが大人世代からの顰蹙を買い攻撃もされたが、彼らは容易には挫けないだけの逞しいエネルギーを持っていた。その意味でも、戦後初期の青年による地域文化活動には、半世紀を過ぎた現在に於ても学ぶべき多くの示唆を含んでいる。

VI 総括

終戦後の混乱期にあって、文化に対する飢渴感を癒すために、秋田県内各地域において活発な文化活動が展開された。その中で敗戦3年目の1948年に誕生した岩城町亀田の青年演劇運動は、地域住民の支持を得て約12年間続いた。演劇運動は日本の高度経済成長の波に呑み込まれて終焉したが、現在の岩城町では青年演劇の後輩たちが町の活性化のために、種々の“地域おこし”の中核となって活躍している。

亀田の青年演劇「ガン座」のもと会員に対するアンケートと面接調査によって、演劇が町民に与えた影響と、演劇を通して青年自身が学び合った文化的環境の人間形成への影響について考察した。これらの戦後初期の青年による地域文化活動から、現在われわれが学ぶべきもの

は、青年達の“生きる力”、即ちエネルギーと、それを伸ばす地域社会の目に見えない教育的・文化的な機能であると結論した。

本研究において、一次史料や文献の収集が不十分であって点は反省される。岩城町亀田の青年演劇は現在でも十分評価できる質の高い地域文化活動であったが、このような例は秋田県内の他地域に於ても埋もれたままになっているものと思われる。戦後の混乱期に各地の地域文化活動がどのような状況にあったか、その時青年達はどのような役割を果たしたか、などの具体的事例を明らかにする作業を今後の課題としたい。

そのような実践を重ねることによって、とかく“ヤクザ芝居の青年会”と揶揄されてきた戦後初期の青年達の生き方と、ひいては新制中学校教育に対する正当な評価が生まれてくるものと期待されるからである。

謝辞

本稿は秋田大学大学院教育学研究科の修士論文を、再編・修正したものである。

稿を終えるにあたり、本研究にご協力を頂いた岩城町亀田のもと演劇関係者の皆様、並びに貴重な資料を提示して下さいた佐々木良子氏をはじめ、佐々木士郎氏、斎藤雅子氏に心から感謝申し上げます。また修士論文の御指導を賜った秋田大学大学院教育学研究科・對馬達雄教授に深甚なる謝意を申し上げます。

(受理日：平成11年7月26日)

注・文献

- 1) 文部省：学制百年史。ぎょうせい、678頁、1972年
- 2) 中嶋明勲、星永俊：21世紀への社会教育—生涯学習の理論と実践—。ミネルヴァ書房、41頁、1992年
- 3) 長浜功：青年運動（細谷俊夫、他編：教育学大事典）。第一法規出版、66-67頁、1978年
- 4) 守屋毅：村芝居。平凡社、1988年
- 5) 井戸川隆充：全国地域イベント成功事例集。WAVE出版、1996年
- 6) 秋田県教育委員会：秋田県教育史・第5巻。649-650頁、1985年
- 7) 秋田県教育委員会：秋田県教育史・第7巻、年表統計編。402-408頁、1986年
- 8) 前掲書6)。647頁
- 9) 前掲書6)。672-673頁
- 10) 伊藤日出男：理学療法教育の現状と戦後新教育から学ぶもの—「問題解決学習」についての調査報告。弘前大学医療技術短期大学部紀要、第12号、106～136頁、1988年
- 11) 文部省：学制百年史・資料編。728頁、1972年

- 12) 秋田県教育委員会：教育一覧・調査統計速報。6号、1951年10月
- 13) 岩城町史編集委員会：岩城町史。岩城町教育委員会、271-272頁、1996年
- 14) 臨時教育審議会：「教育改革に関する第二次答申」第1部第2節（2）「教育荒廃の諸要因」。1986年
- 15) 伊藤正孝：20代にも大量自殺した『滅びの世代』の痛ましさ。朝日ジャーナル、27巻、33号、9-12頁、1985年
- 16) 大田堯編著：戦後日本教育史。岩波書店、26-35頁、1978年
- 17) 阿久悠：瀬戸内少年野球団。文藝春秋、37頁、1979年
- 18) 新野直吉：近代の秋田。秋田魁報社、292頁、1991年
- 19) 秋田市：秋田市史・第14巻、文芸・芸能編。813-816頁、1998年
- 20) 秋田魁新聞：1946（昭和21）年8月14日社説「盆踊りと農村生活」、1948年（昭和23）年3月23日社説「地方文化の追求」、同年7月17日社説「盆踊りと新時代感覚」、同年8月25日社説「農村再組織と青年文化」
- 21) 原太郎：原太郎芸術論集・第2巻。未来社、59-63頁、1976年
- 22) 秋田魁新聞：1946（昭和21）年2月18日
- 23) 秋田魁新聞：1946（昭和21）年8月10日
- 24) 秋田魁新聞：1946（昭和21）年4月29日
- 25) 秋田魁新聞：1948（昭和23）年6月27日、同年9月12日
- 26) 戸坂康二：解説—昭和戯曲小史—（昭和戯曲集）。角川書店、401頁、1953年
- 27) 前掲書19)。777-778頁
- 28) 1948（昭和23）年の1年間で秋田魁新聞紙上に見られる秋田の演劇をめぐる主な論争として、秋田労協主催の演劇コンクール、労組と演劇活動、自立演劇、などに関する多くの意見が見られる。
- 29) 前掲書19)。793-794頁
- 30) 前掲書13)。213-214頁
- 31) 秋田県教育委員会編集発行：秋田ふるさと紀行ガイドブック「祭り・行事編」。55頁、1997年
- 32) 河竹繁俊、他編：演劇百科大事典・第3巻。317頁、1960年
- 33) マックス・フリッシュ、中野孝次訳：アテネに死す。白水社、319頁、1991年
- 34) 前掲書13)。239-240頁、355-367頁
- 35) 岩城町教育委員会発行のふるさと文集第1集は、「南天窓・佐々木忠郎先生文集」（1990年）で、その後ほぼ毎年発行され、1998年には第9集として「秋

高澄爽・渡部誠一郎先生文集」が発行された。

- 36) 竹内敏晴：演劇と教育（細谷俊夫、他編：新教育学大辞典 1）。第一法規出版、229頁、1990年
- 37) 同前書、229頁
- 38) 佐藤守、保田正毅、新井真人：東北地方における伝統的青年集団の実証的研究。秋田大学教育学部教育学研究室、1 - 5 頁、1986年
- 39) 茶谷十六：ふるさとの祭りと芸能（鎮守の森、第 3 巻・秋田）。153-155頁、1976年
- 40) ウルリヒ・アムルンク著、對馬達雄、佐藤史浩訳：反ナチ・抵抗の教育者－ライヒヴァイン－1898-1944-。昭和堂、30-55頁、1996年
- 41) 加藤武郎：ガン座とかみしばい。げいぶん岩城（岩城町芸術文化協会）、第 9 号、19-21頁、1985年
- 42) 細谷俊夫：教育の哲学。創文社、93-95頁、1962年